

# 勝福寺古墳測量調査報告書

2001年6月

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室

# 勝福寺古墳測量調査報告書

2001年 6月

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室

## 例 言

- 1 本書は兵庫県川西市火打に所在する勝福寺古墳の測量調査報告である。
- 2 本調査は、大阪大学大学院文学研究科考古学研究室が主体となって実施した。調査は、福永伸哉(大阪大学助教授)の指導の下、清家章(同助手)が担当した。
- 3 調査期間は2000年7月17日から8月7日までである。
- 4 写真的撮影は清家が担当した。
- 5 採図のうち、図3を除いては、方位はすべて座標北を示し、標高は海拔を示す。
- 6 調査には考古学研究室の学生が参加した。参加者は以下のとおりである。寺前直人・長友朋子・西谷彰・林正憲・藤井章徳・三浦俊明・石井智大・瀬川貴文・中村大介・福辻淳・小塙光樹・河奥祥子・河盛久美・北村順子・西念佑馬・高松雅文・若菜愛・和田一之輔・安東裕世・伊藤文彦・大西美緒・柏原龍嗣・久田祥子・塩谷晃世・中川二美・松本史彦・向井佑介・森先一貴・横田深一郎・分嶋陽子・岩佐健司・小川智子・樺田妙・金田啓・田中由里・中村里美・望月誠子・吉田知史・渡辺今日子
- 7 調査の実施にあたり、勝福寺および川西市教育委員会より多大なご協力をいただいた。
- 8 本書の執筆は、中村(大)・高松・和田・清家が担当した。分担は文末に示した。
- 9 本書の編集は福永の指導の下、清家が担当した。

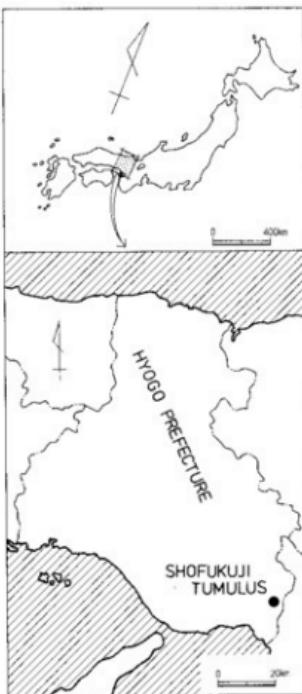


図1 勝福寺古墳の位置

## 目 次

---

第Ⅰ章 調査経過.....	1
1 周辺の遺跡.....	1
2 過去の調査.....	3
3 謝辞.....	4
第Ⅱ章 調査成果.....	5
1 墳丘測量の成果.....	5
2 横穴式石室の形態.....	6
3 採集遺物.....	8
第Ⅲ章 まとめ.....	12

## 図版目次

---

図版	図版
1 1 墳丘遠景	3 1 横穴式石室入口 1
2 墳頂部の現状	2 横穴式石室入口 2
2 1 横穴式石室石材露出状況	4 1 横穴式石室奥壁
2 石室石材露出状況細部 1	2 横穴式石室玄門
3 石室石材露出状況細部 2	
4 墳輪出土状況	
5 地輪片	

## 挿図目次

---

図 1 勝福寺古墳の位置 (伊藤製図) .....	iii
図 2 周辺の遺跡 (和田製図) .....	2
図 3 1971年当時の墳丘 (石井製図) .....	3
図 4 墳丘測量図 (向井製図) .....	7
図 5 鉄器実測図 (塙谷製図) .....	8
図 6 横穴式石室実測図 (中川製図) .....	9
図 7 墳輪実測図 (塙谷製図) .....	11

# 第Ⅰ章 調査経過

## 1 周辺の遺跡

兵庫県南東部と大阪府北西部にまたがる西摂平野は、北は長尾山丘陵、東は千里丘陵、西は六甲山地に囲まれ、南は大阪湾に面している。勝福寺古墳はその北東部、長尾山・五月山両丘陵間から平野部に流れ出る猪名川西岸の長尾山丘陵先端に立地している。(図2)。当地域には旧石器時代より人々の生活、活動の痕跡が残されており、古墳も多数分布している。以下では古墳時代を中心に猪名川流域の歴史的環境について主に概観する。なお、図2は古墳時代の遺跡を中心に分布を示したものである。

まず猪名川西岸の地域をみてみる。前期の首長墳は長尾山丘陵の尾根上に築かれる。前方後円墳である万籾山古墳(墳長54m)が築造され、竪穴式石室から輦輪形石製品などの出土が伝えられている。ついで前方後方墳の長尾山古墳(墳長36m)が築かれる。しかし、中期になると長尾山丘陵には首長墳は認められなくなり、かわって猪名野・塚口の地に首長墳が築かれるようになる。前期末から中期初頭の水堂古墳(墳長60m)・池田山古墳(墳長71m)を端緒に、伊居太古墳(墳長92m)・御願塚古墳(墳長52m)・御園古墳(墳長60m)・南清水古墳(墳長46m)などの諸古墳が存在し、6世紀前葉の園田大塚山古墳(墳長44m)まで継続的に古墳は築造される。このころになると長尾山丘陵上にふたたび首長墳が築かれるようになる。勝福寺古墳は、こうした古墳群の消長が顕著に認められる6世紀前半の古墳である。つづいて6世紀末葉から7世紀には長尾山丘陵に中山寺古墳(墳長不明)や中山莊園古墳(径10m)が築かれる。中山寺古墳は両袖式の横穴式石室に刳抜式家形石棺をもち、中山莊園古墳は外護列石を六角形状にめぐらし、南側にテラスを付設する。同じ頃、長尾山丘陵には100基を優に超える古墳からなる大型の群集墳である長尾山古墳群が形成される。

一方、猪名川東岸に目を転ずると、前期古墳は大きく3地域にわかれて分布する。北部の五月山丘陵上には前方後円墳である池田茶臼山古墳(墳長62m)と円墳の姚三堂古墳(径27m)が築造され、中部の待兼山丘陵上には待兼山古墳(墳長不明)、さらに南の通称豊中台地上には大石塚古墳(墳長80m)と小石塚古墳(墳長49m)が築造されている。

中期になると古墳の分布状況は大きく変化し、豊中台地の中位段丘上に展開する桜塚古墳群に古墳の築造は集約される。桜塚古墳群では、中期になると墓域を東に移動し、大塚古墳(径56m)・御獅子塚古墳(墳長55m)・狐塚古墳(墳長不明)が継続的に築造される。中期に属するこれらの古墳は甲冑をはじめとする豊富な副葬品から、畿内政権との密接な関係が想定されている。しかし、桜塚古墳群における首長墳の築造は中期後葉になるとかけりを見せ始める。

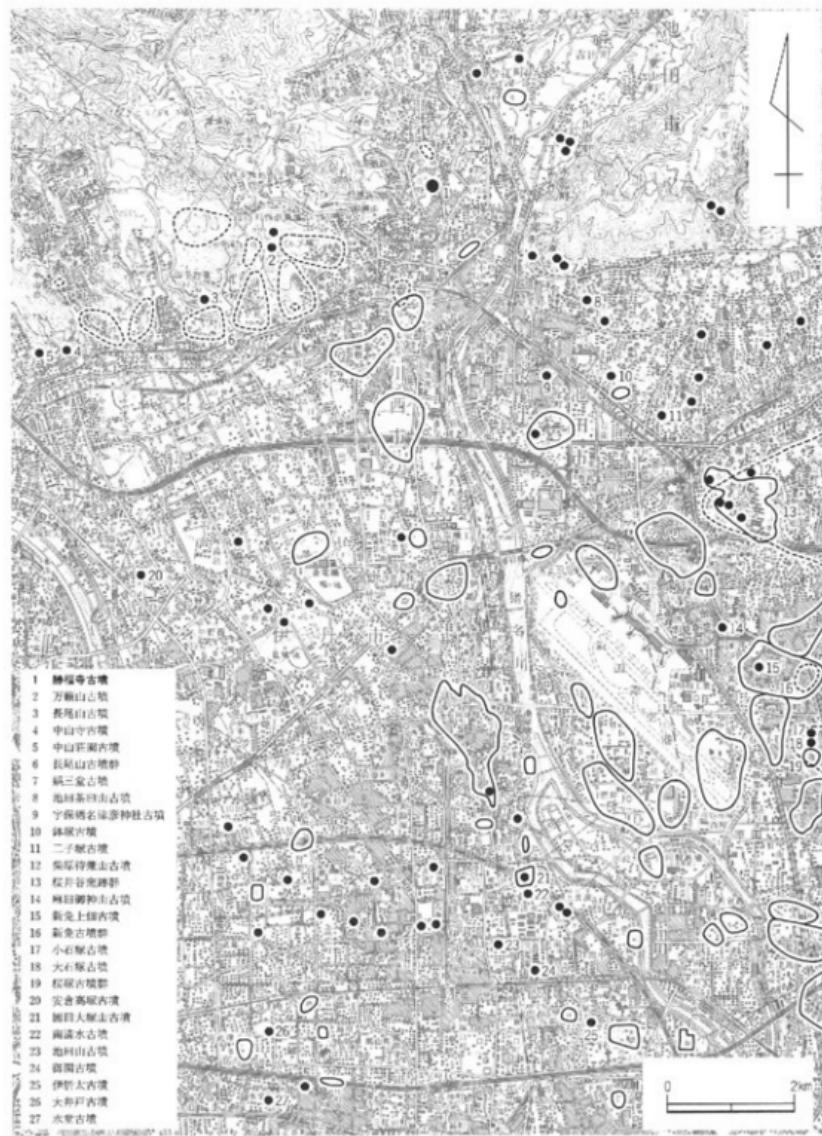


図2 周辺の遺跡

これ以降、首長墳は、帆立貝式古墳の新免2号墳（墳長24m）を経て、6世紀前半には横穴式石室を2基有するとされる前方後円墳の二子塚古墳（墳長45m）が北部の池田市に築造され、6世紀末～7世紀初頭には大型の横穴式石室をもつ円墳の鉢塚古墳（径45m）が築造される。鉢塚古墳を最後にこの地域における大型古墳の築造は終焉を迎える。

このように猪名川両岸において、6世紀前葉に首長墳の築造に大きな変化を見ることができる。勝福寺古墳はそうした時期の所産であり、導入期の横穴式石室を有する。猪名川流域における古墳の動向を考える上で、勝福寺古墳の果たす役割は大きい。（和田）

## 2 過去の調査

川西市勝福寺古墳は、明治20年以前から建築用壁土として封土が採土され続けた結果、横穴式石室の側壁と羨道入口が露出し、内部において多くの副葬品が発見されるに至り、1891年（明治24年）にその存在が確認されるようになった。1892年（明治25年）には坪井正五郎による「攝津國川辺郡川西村発見古器物考」が勝福寺に伝えられ、発見された遺物は大野雲外の『日本考古学図譜』に図示されている。この横穴式石室からは画像帶神獸鏡、六鈴鏡、金環、碧玉製管玉、土玉、鉄製刀剣類、袋状鉄斧、馬具、鉄釘、須恵器などが出土した。

学術的調査が行われたのは1929年（昭和4年）であり、木村次男が「攝津の鈴鏡出土の古墳」と題する報告をし、勝福寺古墳は主体部に横穴式石室を持つ前方後円墳としている（木村1929）。これに対し、1934年（昭和9年）に京都帝国大学考古学研究室の梅原末治らによる調査が行われ、翌年「攝津火打村勝福寺古墳」において前方後円墳ではなく、時期を異にする円墳2基が連接したものであるという見解が出された（梅原1935）。こうした調査の一方で、古墳からの採土は引き続き行われ、墳丘南側は1933年（昭和8年）の採土によりコ字状の崖が生じ、頂部には深さ60cmの窪地ができる。その際、コ字状の崖から北へ約5mの地点において五獣形鏡、鹿角製刀装具の付いた刀片が出土し、この箇所に埋葬施設が存在することが明

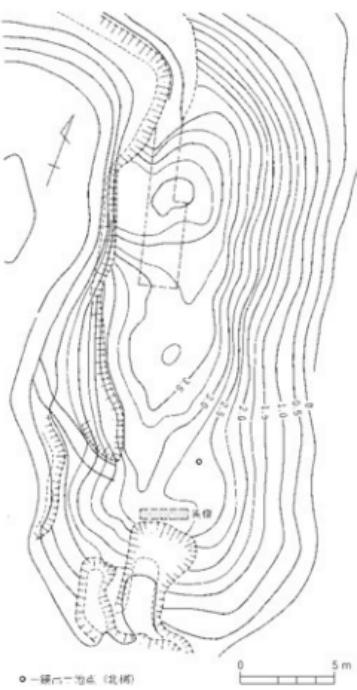


図3 1971年当時の墳丘  
(武藤1974より再トレス、一部改変)

らかとなった。

1971年（昭和46年）には川西市教育委員会による調査が行なわれており、その成果は『かわにし』川西市史第一巻・第四巻にまとめられている（武藤1974、亥野1976）。その調査において、コ字状の崖のすぐ北側において主軸を東西方向とする木棺を納めた粘土槨が発見された。そこからは金環、梶子玉の首飾り、大刀、鉄鎌が出土している。この粘土槨は、1933年に五獸形鏡と刀が出土した埋葬施設とは位置が異なることから、横穴式石室以外に2基の埋葬施設が存在することが明らかになつたのである。これ以降、1933年の埋葬施設は北槨、1971年検出の粘土槨は南槨と呼称される。また、この調査においては、2基の円墳が連接したという梅原末治の見解を引き継いでいる。つまり、横穴式石室を埋葬施設とする北墳と、北槨と南槨を埋葬施設とする南墳が連接しているとの理解をしているのである。ただ、これまでの調査では、北墳と南墳とされる墳丘が接する箇所の調査が、十分であるとはいがたい。勝福寺古墳が前方後円墳である可能性は依然としてあり、解明すべき大きな課題として残されているものといえよう。

（中村）

### 3 謝　　辞

本調査を遂行するに当たり、勝福寺住職後藤善成氏には古墳の調査を快諾していただいただけではなく、作業の円滑化に関してさまざまな援助を与えられた。さらに、川西市教育委員会岡野慶隆氏・祭本敦士氏からは、調査に関して適宜指導をいただくとともに、周辺の遺跡に関する有益な教示を賜った。また、隣接する池田市教育委員会の田上雅則氏からは調査の計画段階で適切な助言を得た。このほかにも調査作業の円滑化に関し、八坂神社や地元自治会をはじめ多くの方々から多大な援助を得た。記して感謝の意を表したい。

（清家）

### 参考文献

- 木村次男 1929「攝津の鉢鏡出土の古墳」『考古学雑誌』第19巻第11号 日本考古學會、東京：pp.20—27
- 梅原末治 1935「攝津火打村勝福寺古墳」『近畿地方古墳墓の調査一』日本古文化研究所報告第一 日本古文化研究所、奈良：pp.44—51
- 武藤 誠 1974「考古学からみた川西地方」「かわにし」川西市史第一巻 川西市、兵庫：pp.39—168
- 亥野 強 1976「古墳時代の遺跡と遺物」「かわにし」川西市史第四巻資料編1 川西市、兵庫：pp.81—104

## 第II章 調査成果

### 1 墳丘測量の成果

今回、大阪大学考古学研究室ではより広い範囲を対象として、25cmの等高線間隔で勝福寺古墳の測量調査を行い、新たに墳丘測量図を作成した（図4）。以下ではその概要を述べたい。

過去の調査で明らかとなっているように墳丘の形態は、墳丘の西側及び南側が過去に大きく削平されており、とくに西側部分では石室の隅石が大きく露出している状態である。1971年の墳丘測量図（図3）と比較すると、墳丘に大きな変化はないといえる。ただし、墳頂平坦面の中央には長さ約10mに及ぶ浅い落ち込みが南北方向に認められた。これは1971年に調査されたトレント跡であると思われる。墳丘南側にあるコ字状の搅乱部のすぐ北側にも東西方向の落ち込みが見られるが、これも南側調査時のトレント跡であろうと思われる。

古墳の周囲から地形を眺めていくと、勝福寺古墳は北から南へ下りてくる丘陵先端部に位置する。墳丘の北側には標高57.5mの平坦部が存在する。その平坦面が古墳に伴う人為的な平坦面であるかどうかは明らかではない。この平坦面と墳丘の間には、幅7mの掘り割り状の谷地形が認められる。また、墳丘の北及び東側には墳丘を取り巻くように道が形成されている。墳丘の東側は、土地境界を離れて急な斜面となって、丘陵の東側を走るバイパスまで下っていく。墳丘の南側は、墳丘から丘陵の緩斜面になだらかに続いている。

墳丘の北側と北西側は墳丘が崩れているため、墳丘の立ち上がりは明らかでない。残りがよいと思われる東側を参考にすると54.00mあたりで平坦部から傾斜が急角度になる様子が確認される。墳丘最高点はいわゆる北墳の中央にあり、その標高は60.14mである。墳頂部は、その最高点から南側に向かって比較的緩やかに下降した後、58.00mの等高線付近で再び急激に下降する。なお、墳頂部には、南墳と北墳を区画するような痕跡は認められない。

墳丘の変化が少ないと考えられる墳丘東側を中心に観察すると、從来北墳とされた石室をもつ墳丘部分は、1971年の調査においても想定されているように、墳頂部や残存部分の等高線からほぼ円形であることが確認できる。そして等高線56.50m～57.50mあたりに注目してみると、墳丘東側の等高線は基準杭C2の東あたりで、やや屈曲して南へ直線的に延びている様子が看取される。さらに南墳とされた部分については、屈曲部から南側に向かって直線的に等高線が広がるのに加え、南東部において鈍角ではあるものの等高線が屈曲し、西へ直線的に延びる様子が認められる。

このように、残存状況の比較的良好な墳丘東側、東南部の等高線を重視すれば、從来南墳とされていた部分は円墳であるとは必ずしもということはできない。むしろ、方形を呈するという

観察がより適当であり、勝福寺古墳がこの部分を前方部とする前方後円墳である可能性を考慮に入れるべきであろう。後円部に横穴式石室を持ち、前方部に木棺直葬を伴う前方後円墳には京都府井ノ内船荷塚古墳、大阪府高木車塚古墳などがあり、勝福寺古墳が前方後円墳であるとすれば、そうした例の一つとなる。ただし、前述したように勝福寺古墳には墳丘が大きく損なわれている部分があり、古墳の形状や規模に関する断定的な記載は差し控えるべきと考える。正確な墳形・規模は今後の発掘調査に委ねたい。

(中村)

## 2 横穴式石室の形態

N-26°-W方向に開口する右片袖式の横穴式石室が墳丘北側に位置する(図6)。前節で勝福寺古墳が前方後円墳となる可能性を指摘したが、その場合、横穴式石室は墳丘主軸に平行し、前方部の反対側に開口することになる。

石室は、かつて白石太一郎によって勝福寺式という型式名が与えられたことのある古式のいわゆる畿内型横穴式石室である(白石1966)。規模は現状で、全長8.94m、玄室長4.72m、玄室幅2.30m(奥壁付近)、2.34m(玄室中央付近)、2.30m(玄門付近)、玄室高2.43m(奥壁付近)、2.45m(玄室中央付近)、2.45m(玄門付近)、羨道長4.22m、羨道幅1.36m(玄室寄り)、1.41m(羨道入口付近)、羨道高1.53m(玄室寄り)で、前壁高83cm、袖幅91cmを測る。

平面的な特徴として、玄室は長幅比がほぼ1:2となる長方形を呈している。羨道は主軸が玄室よりもやや東に振れており、羨道部最下段の石材の並び方も直線的ではない。

次に立面的な特徴として、玄室の横断面は壁面下半を垂直、上半を顯著に持ち送る壁面、羨道では垂直壁面を基調とする。玄室の天井は多少の高低差を伴いつつもほぼ同一の高さで架構されているのに対し、羨道では玄門から羨道入口に向かって徐々に高くなるよう架構されており、前壁下端と羨道入口の高低差は49cmとなっている。玄室の床面は、現状では水平となっている。床面の遺存状況は不明ながらも、基底石の下端がおおよそ確認できることから、築造時の床面の高さも現状の床面の高さ程度で、またほぼ水平だったと考えられる。羨道の床面は現状で羨道入口側が高くなっている、羨道の中ほどには段が観察される。この段には石組が伴うようで、1971年の調査でもこの石組が確認されている。また、現状では視認できないが、この段よりさらに羨道入口側にも石組が存在していることが報告されている。報告者は、この2つの石組を閉塞石の一部と解釈している(亥野1976)。しかし、1971年の調査によれば石組と石組の間には砂土が置かれていたということであるので、羨道床面に段を形成するための石組である可能性も考えられる。

玄室の段積みは、奥壁・両側壁ともにおおよそ6段を基調としているようで、横目地は比較的明瞭に観察される。それに対して、羨道の側壁は3~4段程度積まれているようすが観察されるが、横目地はあまりはっきりしない。袖部は3段で構築されており、その上に前壁を兼ね

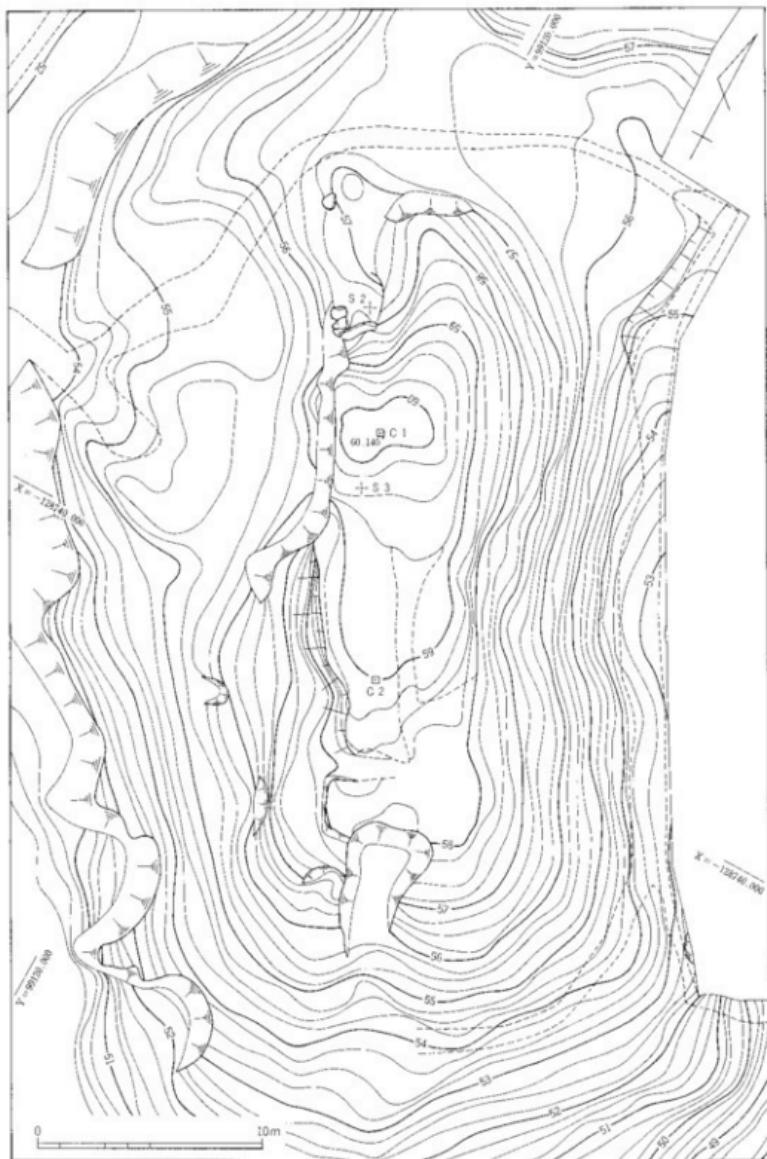


図4 墳丘測量図

た羨道天井石が架構される。この石材は羨道幅にあわせて架構されたようで、前壁の壁面構成をあまり意識していないように思われる。

石室の構築方法を観察していくと、玄室ではまず基底石に上段の石材よりもやや大きめの石材を据えている。その際に小さな石材を床面との間に咬み合わせることで基底石を安定させている様子が観察される。そして、基底石の上に石材を順次積み上げていくが、3段目までは比較的垂直に積み上げていくのに対し、4段目以降は明瞭に持ち送っている。傾斜が変化するこの横目地は、玄門部の天井石の下端を前後する高さに対応している。また、3段目までは石材を横長に積んでいるのに対し、4段目付近では比較的正方形となっており、傾斜変化に際して異なる石材を選択している可能性が指摘できよう。

一方で、羨道では基底石に上段と同様の大きさの石材を用いており、基底石と上段の石材の明確な使い分けは指摘できない。また、上段にいくに従ってある傾向が捉えられるというような用石法も観察できない。使用石材は玄室に比べて全体的に小さな印象を受け、特に羨道右側壁では、その傾向がとくに顕著に見受けられる。羨道の持ち送りに関しては、比較的垂直を志向しているようで、羨道右側壁の中ほどでややせり出しているが、構築後の歪みによるものかどうかは判断できない。

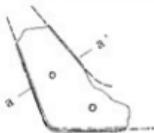
天井石の架構においては、大きな石材を架構した後に、石材の隙間を埋めるように上部から詰石を施しているのが観察できる。石室の全体的な印象としては、詰石を多用しており丁寧に石室を構築しているといえる。京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏のご教示によると、大きな石材は花崗岩を主体にしており、詰石にはホルンフェルス化した石材も用いられている。石材は特に加工した痕跡はなく、自然剥離面の平坦な面を巧みに利用し、石室を構築している。

勝福寺古墳の横穴式石室からは6世紀前葉を前後する時期の須恵器が出土している。奈良県市尾墓山古墳（河上ほか1984）、東乗鞍古墳（千賀1997）などとともに、勝福寺古墳の石室は形成期の畿内型横穴式石室を考察する上で重要な資料といえよう。

（高松）

### 3 採集遺物

今回の調査では埴輪片、須恵器片各数点が埴丘周辺で、鉄器片数点が玄室内で採集された。



ここではそのうち主要なものを報告することにしたい。

鉄器片（図5）の形態は三角形状を呈し、その中央付近に穿孔が二個所確認できる。鉄を留めるための穿孔であろうか。重量は8.0gを量る。性格は不明である。

円筒埴輪は胴部片が2点、底部片が1点認められる（図7）。いずれも厚手のもので、黒斑は認められない。形態についてはすべて破片からの復元であるが、それによると図7-1は胴部径18.4cm、図7-2は胴部径

図5 鉄器実測図

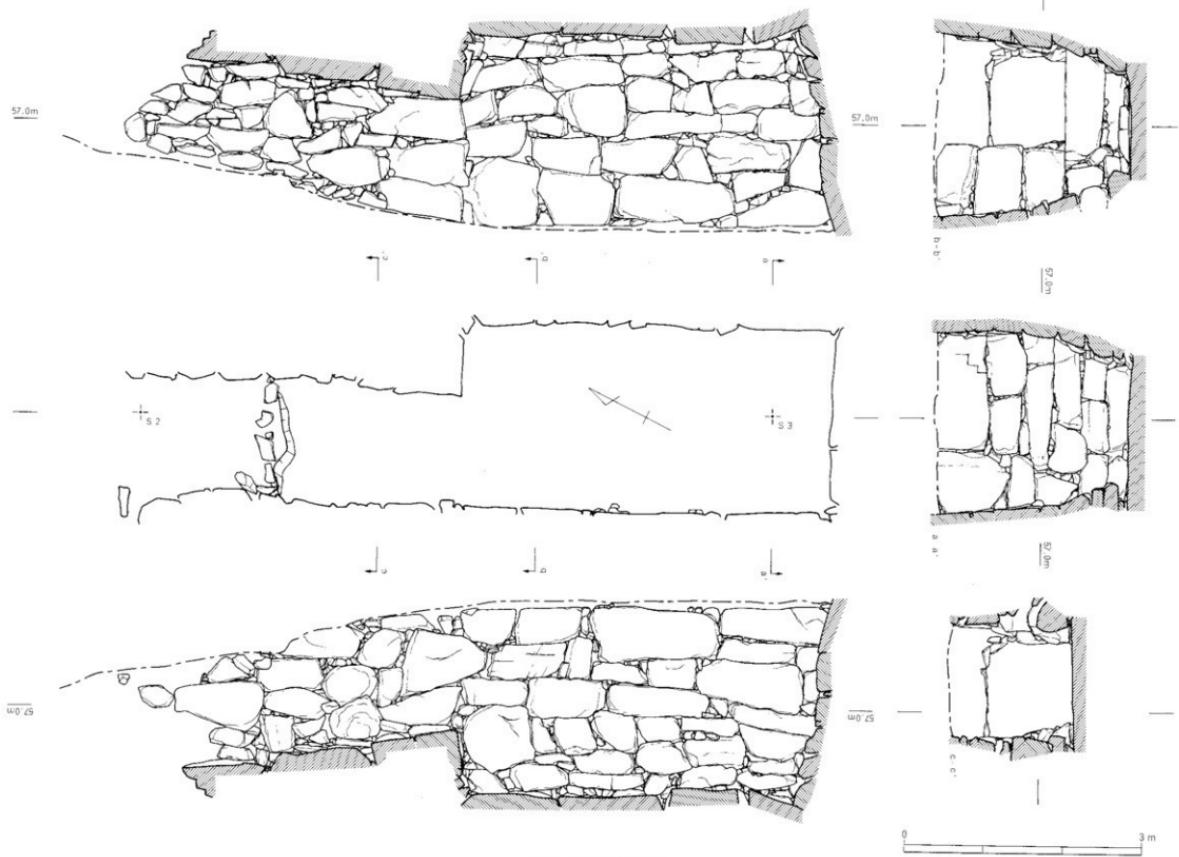


図6 横穴式石室実測図

23.8cm、図7-3は底部径21.6cmとなる。胴部の直立する形態、および胴部径と底部径に大きな差が認められないことから、底部から口縁部に向かって広がるような形態にはならず、直立する形態になるとおもわれる。以下、各破片ごとに特徴を記していく。

図7-1では外面調整は一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケを施している。

一次調整のハケ工具と二次調整のハケ工具は同じものと思われ、その条線密度は3~4/cmと非常に粗い。内面調整はナデおよびハケが認められる。内外面ともに橙色(Hue5YR7/8)を呈す。

図7-2はまず外面調整をみると、一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケが認められる。ハケメの条線密度は6~7本/cmである。一条の線刻が認められる。内面調整はハケの後にナデを施している。色調は内外面ともに橙色(Hue5YR6/6)である。

小さな破片という観察の制約があるが、以上2点にみられるヨコハケには、原体を器壁上でとめた箇所が認められず、速い回転速度で一気にヨコハケを施した様子が窺える。

図7-3は底部片であり、外面調整は一次調整のタテハケのみ確認できる。ヨコハケは認められない。ハケメの条線密度は6~7本/cmである。内面調整にはナデがみられる。色調は外面が橙色(Hue5YR6/6)、内面は橙色(Hue5YR7/6)を呈す。この他にもヘラ描き線刻のある破片など数点が採集されている。  
(和田)

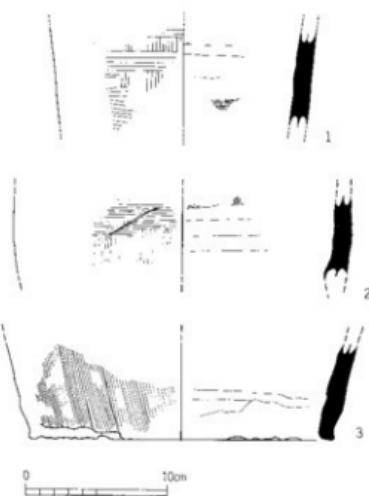


図7 埋輪実測図

#### 参考文献

- 亥野 強 1976「古墳時代の遺跡と遺物」『かわにし』川西市史第四巻資料編 I 川西市、兵庫: pp.81-104  
河上邦彦ほか 1984「市尾墓山古墳」高取町教育委員会、奈良  
白石太一郎 1966「畿内の後期大型群集墳に関する一試考—河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として—」『古代学研究』42・43合併号 古代学研究会、大阪: pp.33-64  
千賀 久 1997「畿内の横穴式石室成立期の様相」『古文化論叢』伊達先生古稀記念論集 伊達先生古稀記念論集刊行会、奈良: pp.324-335

### 第III章 まとめ

これまで勝福寺古墳は前方後円墳である可能性と、円墳が2基連接した古墳であるとの2種類の解釈が行われてきた。今回の測量調査からは、等高線のあり方から考えると前方後円墳の方が、より蓋然性が高いと言える。前方後円墳であると仮定した場合、全長40m前後の前方後円墳となる。ただ、墳丘の改変が著しい箇所が多いので、詳細は発掘調査を待つべきであろう。

墳丘から埴輪片を採集できたことも大きな成果の一つである。これまで、墳丘には埴輪が伴うとされてきたが、その実態はまったく明らかでなかった。採集資料とはいえ、本古墳に埴輪が伴うことがほぼ確実となった。本古墳の須恵器はMT15型式からTK10型式に併行するものであり、当該期に埴輪が樹立するならば、円墳よりも前方後円墳がふさわしいものといえる。ただ、埴輪にはヨコハケが残っており、須恵器や石室型式から考えられる年代の調整が大きな課題として浮上した。さらに、1971年度の調査では、前方部（南墳）にあたる部分で葺石らしい拳大の礫が存在したというが、現状では確認できなかった。このほかにも周溝の有無・北榔の内容など、勝福寺古墳には解明すべき点が多い。今後の調査が期待される。

当墳がもし前方後円墳であるのであれば、猪名川西岸でも最後の前方後円墳の一つであり、古墳時代後期における猪名川西岸を代表する首長墳であると評価できる。また、横穴式石室はこの地域に導入された初期のものである。勝福寺古墳が築かれる6世紀前葉には、猪名川の両岸において首長系譜の変動が認められるので、首長墳の消長と軌を一にして、横穴式石室が導入されることになる。この現象はまさに興味深い。

6世紀前葉における首長墳の消長は猪名川流域に限られた現象ではない。京都府乙訓地域の首長系譜を検討した都出比呂志は、地域の盟主的首長墳をだす首長系譜が5世紀前葉・5世紀後葉・6世紀前葉の3つの画期を持って移動することを指摘した。さらにこの盟主墳の移動ならびに首長系譜の断絶は全国的に運動する動向であることを指摘し、各地における盟主墳の運動は大王権力周辺の政治的変動と運動した動きであるとの評価を行った（都出1988）。猪名川流域における6世紀前葉の首長墳の消長は、都出の言う3つ目の画期に相当する。このような観点に立つのであれば、勝福寺古墳は西摂津のみならず、西日本全体における古墳時代後期の政治変動そのものを聞うことのできる重要な資料であると言える。大阪大学考古学研究室では今後も数年をかけてこうした課題の解明に取り組んでいく計画である。そして、その成果を地域の文化財保存と活用にも役立てていきたいと考えている。

（清家）

#### 参考文献

- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇22号 大阪大学文学部、大阪：pp.

## 図 版



(1) 墳丘遠景



(2) 墳頂部の現状



(1) 横穴式石室石材露出状況



(2) 石室石材露出状況細部1



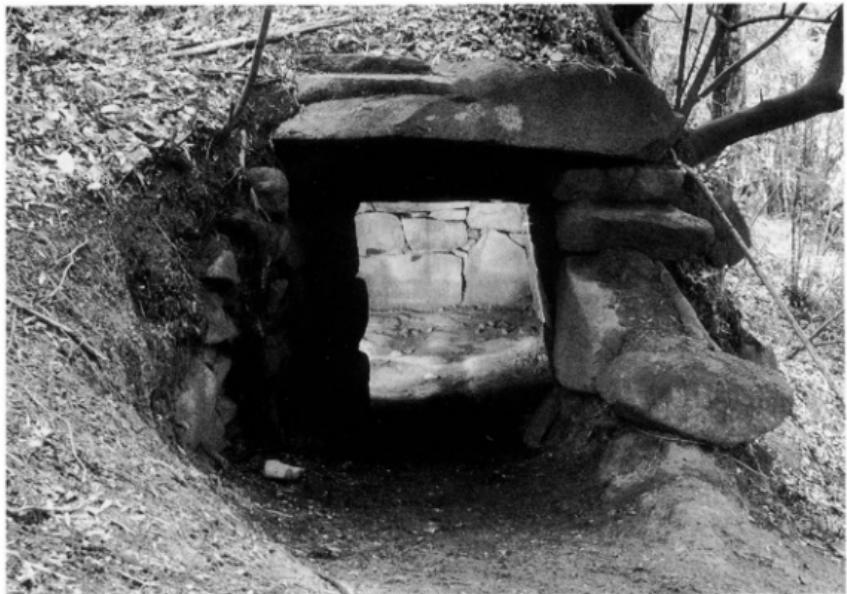
(3) 石室石材露出状況細部2



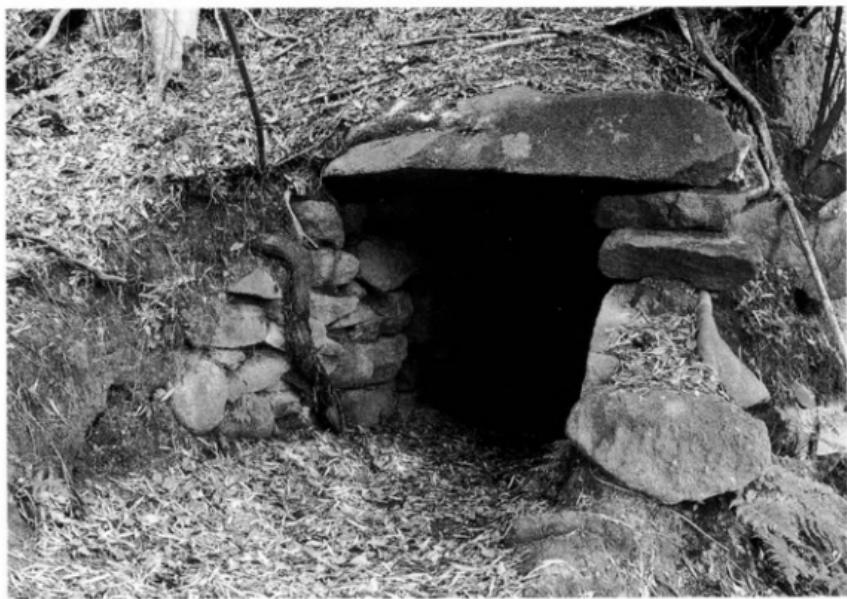
(4) 墓輪出土状況



(5) 墓輪片



(1) 横穴式石室入口 1



(2) 横穴式石室入口 2



(1) 横穴式石室奥壁



(2) 横穴式石室玄門

## 【報告書抄録】

ふりがな	しょうふくじこふんそくりょうちょうさほうこくしょ				
書名	勝福寺古墳測量調査報告書				
シリーズ名					
シリーズ番号					
シリーズ番号					
著者名	大阪大学大学院文学研究科考古学研究室(編者:清家 章)				
発行機関	大阪大学大学院文学研究科考古学研究室				
所在地	大阪府豊中市待兼山町1-5				
所収遺跡名	所在地			コード	
勝福寺古墳	兵庫県川西市火打2丁目			市町村	遺跡番号
				28217	
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
34°50'05"	135°25'01"	000717~000807	0 m <sup>2</sup>	学術調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
勝福寺古墳	古墳	古墳時代		埴輪・鉄器片	墳丘測量 石室尖測

## 勝福寺古墳測量調査報告書

2001年6月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室  
 発行 〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

印刷 有限会社 真陽社  
 〒600 8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル

